

骨太な木の住まいをつくる

東京都・下石神井の家

技術①

1 - 木の家づくりの今

家づくりをとりまく状況は数年来、大きく変わってきている。人口の高齢化、世帯の小規模化は進み、人口と世帯数は長期的な減少に転じつつある。当然、新設住宅は目に見えて減少している。経済的にも大型住宅ローンを組み立てる状況ではない。また阪神淡路大震災での家屋の大規模な被害や欠陥住宅、シックハウス症候群の事例から、住宅の品質を見る消費者の目は厳しくなっている。住宅政策も、量の確保からストックになる高品質な住宅づくりの誘導や、住宅を社会財として流通させる中古市場の整備へと転換している。一九九八年からの五年間だけで、住宅品質確保法の制定と性能表示制度の創設、木造住宅の仕様規定の見直し、既存住宅の性能表示、シックハウス対策のための規制導入など住宅に関する新たな法律や制度が次々誕生している。

では、そのような中で造られている住宅はどうか。戸建て住宅については、住宅展示場を訪ねれば、鉄骨、軽量コンクリート、ツーバイフォー、在来木造ほか多彩な構造や工法の住宅を見ることができる。作り手も大きなハウスメーカーから、地元の住宅会社によるものまで様々である。しかし、構造が木造か鉄骨かなど外見から読み取ることが難しい。室内に入っても、部屋数や大きさは異なるものの、仕上げ材や設備などに大きな違いは見られない。実はこれは展示場に限ったことではなく、現在の住宅の多くは、建材メーカーの製作した住宅資材を組み合わせて仕上げられており、作り手や構造の違いが見えにくい。こうした住宅が、現在では北から南、都市郊外の住宅団地から農村部まで見られ、建つ場所や地域による違いも感じさせないものとなっている。

しかし一方、シックハウス症候群など住宅と健康の関係への関心などをきっかけにして、身体にも自然環境にも負荷の少ない家や、月日を重ねるごとに美しさを増す自然な素材や工法の家づくりに目を向ける人は少なくない。無垢の木の柱や梁をあらわし、壁も漆喰など自然な素材で仕上げ、伝統的な住宅とも異なる木の家づくりの取り組みが各地で見られる。さらに家づくりのみならず、森林や地域の林業にも関心を持ち、伐採地の見学などに参加する消費者も増えている。こうした新たな木の家づくりの取り組みは八〇年代には見られ、バブル経済の崩壊以降、消費者意識の変化の中で急速に広がっているようだ。

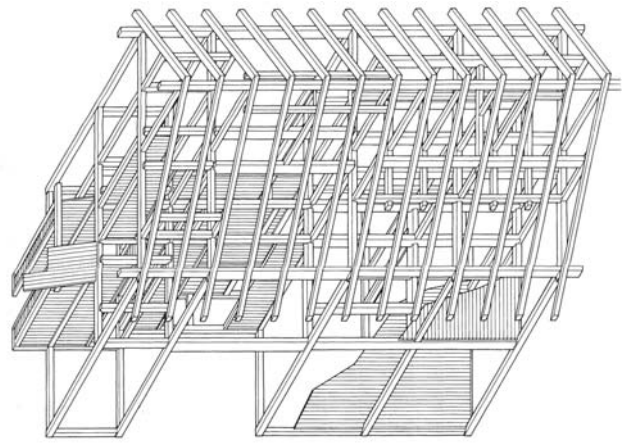


図1 アクソメ図

2 - 〈民家型構法〉の誕生と背景

八〇年代はじめ、私たちも新たな木造住宅像と生産のあり方を示す〈民家型構法〉を提案し、今日まで実践に取り組んできた。〈構法〉とは耳慣れない言葉であるが、家づくりの考え方・システムと言い換えても良い。〈民家型構法〉は、国産材を用いた骨太の架構を基本に、多様な生活の変化を受けとめようという長寿命の家の作り方である。〈民家型構法〉を提案したのは一九八三年。その頃、宮城県沖地震（一九七八年）をきっかけに構造基準が大きく見直された（一九八二年）。しかし、木造住宅の大部分を占める在来工法については、設計者や施工者には構造計画的な意識が薄く、間取りの自由度が高く安価な工法という見方が中心となり、伝統的な軸組工法のもつ合理性は失われていた。柱・梁など構造材は華奢になり耐久性の低下が見られた。また杉や桧など国産の木材は流通上の問題などから用いられなくなり、戦後大量に植林された人工林は手入れがされないまま、伐期を迎えようという状況であった。一方、できあがった住宅地の景観は百花繚乱の状態、家づくりに街並みを育てる視点が欠落していた。

このような木造住宅のあり方を見直す、奥行きのある家づくりの論理がないものか。わが国の木材供給や流通の実態から街なみづくりまで視野に納めうる家づくりの議論が必要ではないのか。このような意識で様々な木造の工法研究と実作を行う中、一九八一年、宮大工出身の田中文男氏に出会い、討議を行う中で伝統工法を踏まえた〈構法〉の構想が浮かび上がった。それが〈民家型構法〉である。〈民家型構法〉の論理は氏の大工職としての技術、木に関する博識、民家や木造建築の歴史への深い造詣などに大半を負っており、われわれは氏の優れた技術情報を、〈民家型構法〉という論の整理と実作を通じ、広くオープン化を図るべきだと考えた。〈民家型構法〉の基本的な考え方は以下にまとめられる。



図2 民家型構法第一作「下石神井の家」漆喰仕上げの外観

3 - 〈民家型構法〉の考え方

①基本構造と多様な空間バリエーション

日本の木造住宅は工法的には、数寄屋的なものと、民家的なもののふたつの流れがある。

前者は機能に応じて空間が用意され、構造体がつくられる。後者ははじめに骨太でシンプルな構造体がつくられ、その空間を機能に応じて使い分けるといった逆の流れである。民家の構造体は、基本構造として一〇〇年以上の耐用性が期待され、空間の骨格が形づくられる。家族や生活、利用の変化に対しては、補助的な構造で対応するシステムである。〈民家型構法〉はこの空間構成の原理を目標とする構法である。基本構造の大架構は金物に依存しない伝統的な構法を基本とし、接合部の強度と耐久性を確保できる骨太な材を用いる。

②地域の環境に合った形態を採用する

日本の民家は、基本構造が地域によって異なり、地域の特性に柔軟に対応している。架構は、地域で入手できる木材の材質や大きさにより左右され、形態も、雪や風など地域の自然条件から導き出されている。〈民家型構法〉の家づくりでは、民家に見られる、環境条件から形態を採る視点が重要であり、この視点こそ「地域に根ざした家づくり」と「良好な街並み形成」を可能にすると考えている。



図3 骨太の材で組まれたロフト



図4 二階廊下

③木の自然で素朴な材質感を大切に空間をつくる

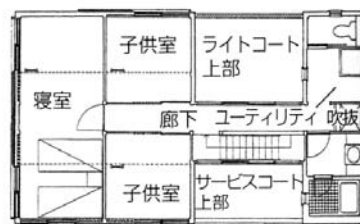
数寄屋が無節や四方柱という希少性と非日常の美を重視するのに対し、民家は木材利用の実用的判断と、木のもつ自然の素朴さやたくましさといった材質感をより重視している。〈民家型構法〉の木の扱いも、日常的な美の実現を目指し、木の自然な材質感を尊重する。節のある骨太な柱や梁をあらわし、床板、間仕切壁、板戸なども素朴で生き活きとした表情にしつらえ、質感のある生活空間として演出する。

④時間をかけて家づくりを行う

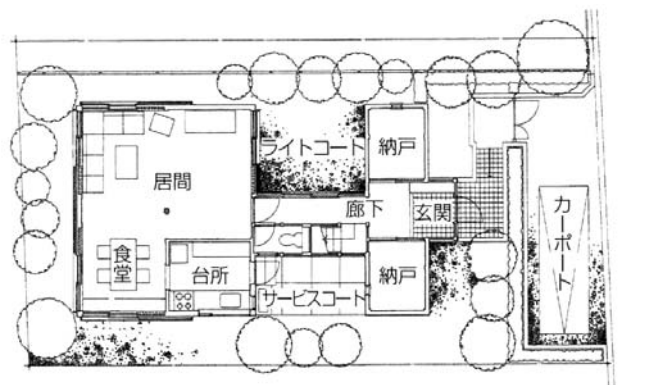
民家と同様、〈民家型構法〉も一挙に完成する家づくりだけを考えてはいない。住宅資金が十分でないなら、住宅の基本的な部分のみを最初の段階でつくり、あとは時間をかけ、二世帯、三世帯に渡ってでも手を入れていけばよい。

⑤構法を軸にして山から住まい手までを結ぶ

〈民家型構法〉は国産材の合理的な活用を考え、家づくりの体制は、山から製材、加工、施工、さらには住まい手の各々が、その役割を効果的に果たし得るものとする。施工はメンテナンスへの配慮から地域の施工者に発注する。しかし、地域での合理的な施工が望めない場合は、住宅建設を二段階（建て方までとそれ以降）に分けて行うことも考慮する。



2階平面図



1階平面図



図5 1・2階平面図

4 - 街なかに骨太な木の住まいをつくる

二〇年前、雑誌に発表した〈民家型構法〉は木造住宅づくりに取り組む地域の建築家に迎えられ、今では〈民家型構法〉の考え方を踏まえた木の住まいが各地でつくられている。

その〈民家型構法〉の記念すべき第一作が下石神井の家（一九八二年）である。東京は練馬の閑静な住宅地、石神井公園にほど近い短冊型の敷地に、二二年経ったとは思えない白い漆喰壁の「下石神井の家」は建っている。比較的交通量の多い道路に面した敷地は、間口が五・五間（約一〇メートル）、奥行が十間（約一八メートル）の東西に細長い宅地で、建設当時は附近に緑が多く、武蔵野の面影を残していた。一八〇平方メートルという敷地は、一〇〇平方メートルの土地に一〇〇平方メートルの住宅といわれる現在の都市の住宅事情に比べると恵まれてはいるが、間口の狭い典型的な街なかの敷地であったことから、この住宅には都市型住宅のプロトタイプとしての考え方が盛り込まれている。

居間・食堂の上に寝室・子供部屋を重ねた居室ブロック、玄関・納戸の上に浴室・洗面・便所を重ねた非居室ブロックの二つを坪庭的な隙間を挟んで分離し、交通量の多い通路に面して非居室ブロック、日当たりの良く静かな西側に居室ブロックを置くことで、騒音の緩和と日照、通風を確保している。これは伝統的な町屋の手法の応用でもある。

建築可能な敷地の有効幅を一杯に使い、間口は三・五間、奥行は七・五間。架構は単純な切り妻形式を採用し、二階建ての蔵型の建物としている。主な柱は、五寸（一四・五センチ）と四・五寸（一三センチ）、梁は、六寸（一七・五センチ）から九寸（二六・五センチ）と骨太な架構である。間仕切壁は将来の間取りの変更に備えて取り外しが可能な壁にしてある。床板と野地板は建物の剛性を高めるために四センチの厚い板を用い、二階の床板は、一階の天井を兼ね、野地板は小屋裏をそのままあらわして、二階の天井を兼ねている。一般的な住宅では、外周壁に掃き出し窓を取るが、窓を開けるとすぐ隣地となることからこの住宅では中庭に面する開口以外は、全て腰窓としている。しかし、渡り廊下になっている中庭面は、全てガラス張りとして明るい開放的な空間である。また、中庭の架構には格子を付け、開放的な渡り廊下から隣地を見下ろすことを避けた。

そんなこの家も竣工後二〇年以上を経て、当時小学生の子供達はとうに成人し、基本構造は変えないまま中庭の一部は部屋に転用されているという。骨太な木の住まいは、育てることを楽しむ住まいでもある。



図6 骨太な梁と漆喰塗りの壁が美しい寝室



図7 西側外観

下石神井の家 1982年

東京都練馬区下石神井
敷地面積：183.5㎡ 延床面積：106.8㎡
掲載紙：新建築 8302 住宅建築 8307
住宅建築別冊 8705
住宅建築別冊 0211